

氏 名 韓 盛旭

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大乙第 164 号

学位授与の日付 平成 18 年 9 月 29 日

学位授与の要件 学位規則第 6 条第 2 項該当

学位論文題目 高麗後期青瓷の研究

論文審査委員	主査	教授	小野 正敏
		教授	篠原 徹
		助教授	小島 道裕
		教授	田中 俊明（滋賀県立大学）
		副館長	上田 秀夫（山口県立萩美術館・浦上記念館）

## 論文内容の要旨

本論文は、朝鮮半島の代表的な陶磁器のひとつである高麗青瓷について、高麗後期を経る中で次第に朝鮮時代の粉青瓷に変質していく実態を、歴史的な背景とともに検証し、これまでの研究史のなかでは明確にされていなかった生産技術の変化と各種紀年銘資料の分析により精緻な編年を構築し、それに基づきこの時期の高麗青瓷の様相を解明したものである。

序章にのべられた視点・分析方法の特徴は、①紀年銘資料を共通項にして、年代の判明する陵墓や寺院、生産地である窯、その流通過程である沈没船一括資料、使用の実態を示す消費地遺跡資料群を関係づけることにより、各期の様相を総合的にとらえること、②朝鮮半島はもとより、日本、中国など東アジア各地での高麗青瓷のあり方を検証したことである。

II章では、対蒙抗争と元の干渉期、倭寇の頻繁な侵入等の対外的要因と、内的には武人執権層と権門勢族による経済的収奪によって社会・経済的矛盾が深化したとされる高麗後期の青瓷生産の特質を明らかにした。特に、専門的分業下で製作された陶磁生産組織「所」の解体が加速し、中央統制によっていた青瓷生産は、統制の緩みと官需から民需へと需要層の変化と増加による生産と供給の拡大もあいまって、その質が低下し粉青瓷へと移行した過程が明瞭となる。一方、武臣政権の経済的基盤であった全羅道地域は対蒙抗争中も比較的被害が少なく、青瓷生産の中心である康津の陶磁製作は緩やかに衰退したことが分かる。つまり、対蒙抗争は青瓷衰退の原因となったが、青瓷の質的下落に決定づけるものではなく、それ以後、元の干渉期と倭寇の頻繁な侵入等、高麗社会の停滞とともに漸進的に衰退したと考える。特に南海岸への倭寇の頻繁な侵入は、康津地域の陶磁生産の質を下落させる決定的な契機となった。また、この時期は長い戦乱による身分制度の弛緩と「所」の解体、収取体制の混乱等で、民需が拡大しながらも工人たちの離散による陶磁生産地の拡散をより増加させた。このような複合的要因は先の時代的背景とともに実用性が強調される日常器種の大量生産を促進させ、青瓷の質的衰退を一層加速化させたのである。

III章では、年代が明瞭となる寺院、城、陵墓、沈没船遺跡などの出土品を悉皆調査し、その年代の根拠と性格を考察した。高麗後期には干支銘、官司銘、記号などの銘文をもつ青瓷資料が増加する。その増加の時期や、あり方から銘文を青瓷の質の保持と流出を防ぐためと結論づけた。またそれら銘文資料によりその年代観を再検討した結果、干支などを従来の陶磁史の一般的な理解である年代よりも60年遅らすことが妥当と判断した。

IV章では、海外における高麗青瓷の出土状況を検討し、その年代と性格を明らかにし、高麗青瓷の流通や機能を考察した。日麗交易は、博多を通じた制限的な公的貿易が中心とされ、高麗青瓷の流通も限定的である。中でも、博多、京都、鎌倉に出土が集中し、各都市の機能を反映した特徴が明確となる。博多は対外交流の窓口として、高麗青瓷も最も大量にまた初期からの出土が認められ、器種は日常品の椀皿を主に出土する。京都は、日本の首都だが、博多、鎌倉に比べその量は少ない。京都の貴族層の朝鮮半島に対する意識と高麗青瓷そのものへの関心のなさ低さによると推定される。注目されるのは鎌倉であり、新興の武家政権の所在地として、積極的に受容したと考えられる。これは、鎌倉出土品は、最良質で壺や瓶、

枕など荘厳と権威を象徴する特殊で高級な器種ばかりが流入したことでわかる。博多との比較などからも、この時期、鎌倉幕府が積極的に九州、特に博多の貿易管理を進め、その利益とまた鎌倉の独創的な文化の構築を欲求していたことがいえる。中国とは海路、陸路による持続的な交易があり、広く各地へ流入したことが確認された。遺跡には貴族層をはじめ一般の都市遺跡、小型墓など多様な階層が認められる。貢納品としては壺や瓶などや画金磁器などの高級象嵌青瓷が重要な品目であったと記録される。これらの高麗青瓷が中国陶磁に与えた影響も予測されるが、資料公開が限定的なため未解決な問題が残された。

V章は、高麗後期青瓷の様相と変遷を考察したまとめである。13世紀代の青瓷は、明宗智陵と崔抗墓、熙宗碩陵、披州恵陰院、珍島竜蔵城、莞島法華寺、濟州法華寺出土品等年代の明確な遺跡出土資料の制作技術的な分析により、12世紀代に絶頂をなした全盛期の翡色青瓷の余韻を維持しながら対蒙抗争等の社会的条件によって漸次衰退したと結論した。14世紀になると、外反鉢、突帯煤匙、高足杯、扁瓶、内底曲面式煤匙等の中国元の影響を受けた新たな様式のモデルの受容が特徴である。また技術的には、実用性と機能性が強調されつつ、器形の大形鈍重化、文様の簡略・集団文様の反復等、図式化・様式化の進行が顕著となり、また、化学分析からも明らかになるように釉色の退化、胎土粗悪化がすすむことが指摘される。『干支』銘や「公須」、「徳泉」、「至正」、「正陵」等の銘文青瓷は、この時期の質の衰退を抑制するためと結論する。また、従来論議が多かった干支銘青瓷の製作時期については、窯場の康津地域の情勢と13世紀出土品との器形比較・胎土と釉薬分析等によって14世紀に製作されたと結論した。干支銘青瓷は「己巳」(1329年)から「甲戌」(1334年)の群と「辛巳」(1341年)から「乙未」(1355年)の群に分けられ、焼成技法や施釉、器形など大きく技術変化している。この変化は務安道里浦海底遺物に代表される末期青瓷へと続くが、この段階を過ぎると、王朝の交替とともに朝鮮前期を代表する新たな陶瓷の伝統である粉青瓷へと移行・発展し、高麗青瓷は消滅を迎えるのである。

## 論文の審査結果の要旨

韓盛旭氏の論文「高麗後期青瓷の研究」は、高麗青磁研究のなかで、大きく次の二点で評価できる。

第1点は、従来の高麗青磁研究が、美術的な視点と伝世品や古くに出土し所蔵されてきた資料を主とし、年代論や工芸的陶磁史に偏っていたのに対して、韓論文は、近年、韓国や日本で大きく展開してきた考古学の発掘成果を最大限に取り入れ、歴史としての陶磁史を目指していることである。特に韓国では、生産遺跡である窯に加えて、暦年代や社会的位置づけの明確な陵墓遺跡、豊富な一括資料が残る流通段階の沈没船遺跡などの重要な資料群が増加している。韓氏は、必然的に、高麗青磁についての新たな資料の博搜とそれらをクロスチェックする考古学的方法による年代観の再構築をなし、それを基準にした5期にわたる歴史背景の説明とともに、今後学会で共有されるべきスタンダードとなりうる詳細な分類、編年モデルを呈示した。

第2点は、高麗青磁研究を、朝鮮半島内にとどめることなく、広く日本、中国など、東アジアの中で位置づけたことである。特に日本については、詳細な現地調査により自ら資料を抽出、集成したものも多く、中国陶磁のなかに埋もれていた高麗青磁が再発掘された。その結果は、単に陶磁器の年代を明らかにするためにとどまらず、日本への海外からの文物として特別な高麗青磁のあり方が明らかにされ、日本の遺跡の性格や交易、交流の問題を考える上で重要な論点となり、日本の研究者にも大きな影響を与えるものとなると評価できる。高麗青磁研究は、東アジアの陶磁史や交流史研究の重要なテーマのひとつとなることを予測させた。

それらにより、本論文を、その視点や方法の独創性と的確性、現時点の編年研究を中心とする到達点として総合的に評価し、学位請求論文として十分であると認めた。以下に、審査委員による一致した本論文の評価と今後の研究課題への期待を要約しておきたい。

審査委員が本論文に関して高い評価を与えた点は次の通りである。

1 年代の根拠となる銘文青磁については、遺跡がもつ情報を十分に活用してこれまでのレベルとは異なる精緻で新たな年代観を呈示した。さらにこれまで注目されなかった陰刻○文などの新たな銘文資料群を集成し、生産地を明らかにし、その意味づけをした。干支銘や官司銘資料の集成とともに、銘文青磁データ集成の呈示としても高い価値をもつ。

2 高麗青磁を、広く東アジアの中に位置づけた研究となっており、特に日本については、発掘資料を博搜し、博多、京都、鎌倉という中世日本の主要都市の異なる性格を高麗青磁の特徴からも論述した。さらに、鎌倉では幕府政権との関わりなど、海外からの舶来文物としての高麗青磁のもつ特別な意味をその器種組成の特徴などから明らかにした。今後、相対化する高級中国陶磁のあり方を考えるうえで、示唆に富む指摘である。

3 先に指摘した新たな年代観にもとづき、高麗青磁の生産、流通とともに、高麗はもとより、元や日本との政治的な関係などを考慮しつつ、5期にわたる分類と編年を様相としてまとめた。

審査委員が、今後の発展させるべき研究課題として期待したい点は以下である。

1 今後、琉球や対馬などの交易拠点となった地域の分析を発展させることで、より東アジアの流通史が明確になると予測できる。中国に関しては、公開資料の制約が大きく、結論づけるには現状では不十分だが、公開が進めば、さらに充実したものに発展すると期待できる。

2 この時期の青磁生産の中心地であった康津地区の発掘成果を「大口所」と関連づけて、本論文の視点で再検討し評価することで、これまで必ずしも十分に明確にされていない官窯としての性格が明らかにされることを期待する。

3 自然科学的分析の成果が、高麗青磁から朝鮮時代の粉青磁への品質変化など、陶磁様相の変遷に活用されていない。窯跡出土品や銘文陶片の分析を進行中とのことであり、今後の展開を期待したい。